

兵児へこの謡うた（末松青萍すえまつせいひょう）

勝かてば 是これ 官かん 負まくれば 是これ 賊ぞく

男子だんし 唯ただ 応まさに 嶮難けんなんを 冒おかすべし

咄とつ嗟さ 曉あかつきに 鹿兒島かごしまを 出いで

絶叫ぜつきようして 夕ゆうべに 渡わたる 太郎山たろうさん

眼がん下か 蕞薺さいじたり 熊本くまもとの 城しろ

手てに 唾つばきして 抜ぬくべし 立食りつしょくの 間かん

君きみ 見みずや 南関なんかん 北関ほっかん 路みち 歴々みちれき

直ただちに 此この関かんを 破やぶらば 一敵いつてき 無なからん

勝是官 負是賊 男子唯應冒嶮難

咄嗟曉出鹿兒島 絶叫夕渡太郎山

眼下蕞薺熊本城 唾手可拔立食間

君不見南關北關路歴歴 直破此關無一敵

解説 明治十年、西南戦争の際、作者が二十三歳で軍団幕僚として征討軍に加わった時の作品。

語釈 ※勝は官負は賊Ⅱ勝てば官軍、負ければ賊軍。西南戦争の時に唱えられた諺。※唯応Ⅱただそのようにする以外ない。※嶮難Ⅱ山川が行手をさえぎりけわしく、容易ならぬさま。※咄嗟Ⅱわめき叫んで叱りつける声。※曉出Ⅱ夜明けに出発する。※鹿兒島Ⅱ西郷に対する信頼から諸郷の私学校生徒は、維新戦争と同じ気持ちで鹿兒島に結集した。※太郎山Ⅱ赤松太郎山。肥後と薩摩の国境にある。※蕞薺Ⅱ小さいさま。※唾手Ⅱ手につばきする、勇躍して事に臨むこと。※立食Ⅱ立つて食事をするほどの短い時間。※歴歴Ⅱ分明なるさま。

通釈 戦いに勝てば官軍として一世に賞揚され、破れれば賊軍として侮蔑され、汚名を後まで残さなければならぬ。男児たるもの。率先してただ一途に險所を越え、困難に勝たなければならぬ。急ぎ、鹿兒島を出発したのは夜明けであつたが、夕刻には絶叫して太郎山の峰を過ぎる。見よ、眼下には熊本城が小さく見える。あれしきの城、抜きとることなど朝飯前、さあ、手につばきして攻略にかかろうか。見おろせば、敵の関門ともいうべき南と北に通ずる路が、ここからはつきりと見える。すぐさま、この関門を破れば、あとは熊本城まで一本道、敵を散らせるだろう。